

豊かな表現で相手に伝わる話し方ができる子の育成を目指して

永井伸幸

1、テーマ設定の理由

〔テーマ設定の理由〕

毎日の生活の中で、友達や家族との会話、授業での発表など子供達は多くの話をしているが、話すことがあまりにも無意識になされているせいか、自分の話し言葉に関心を持っている子は殆どいない。しかし、実際は人前で話すことが精一杯の子や、思いや考えが十分に表現できない子もいるのである。また、教師である私自身も具体的に子供の姿をとらえている訳でなく、「○○君は話せる子だな」という感覚でしかつかんでいないところがあった。したがって十分な評価もできないのである。

以上のようなことや六年生の学習指導要領国語の表現の指導事項を受け、本テーマを設定した。

〔児童の実態〕

男子十三名、女子七名の単学級の六年生である。単学級であり保育園から変わらぬ仲間と過ごしているので、改まって話さなくても分かってもらえるという雰囲気や、誰々は話せる子、誰々は話さない子といった暗黙の了解がある。

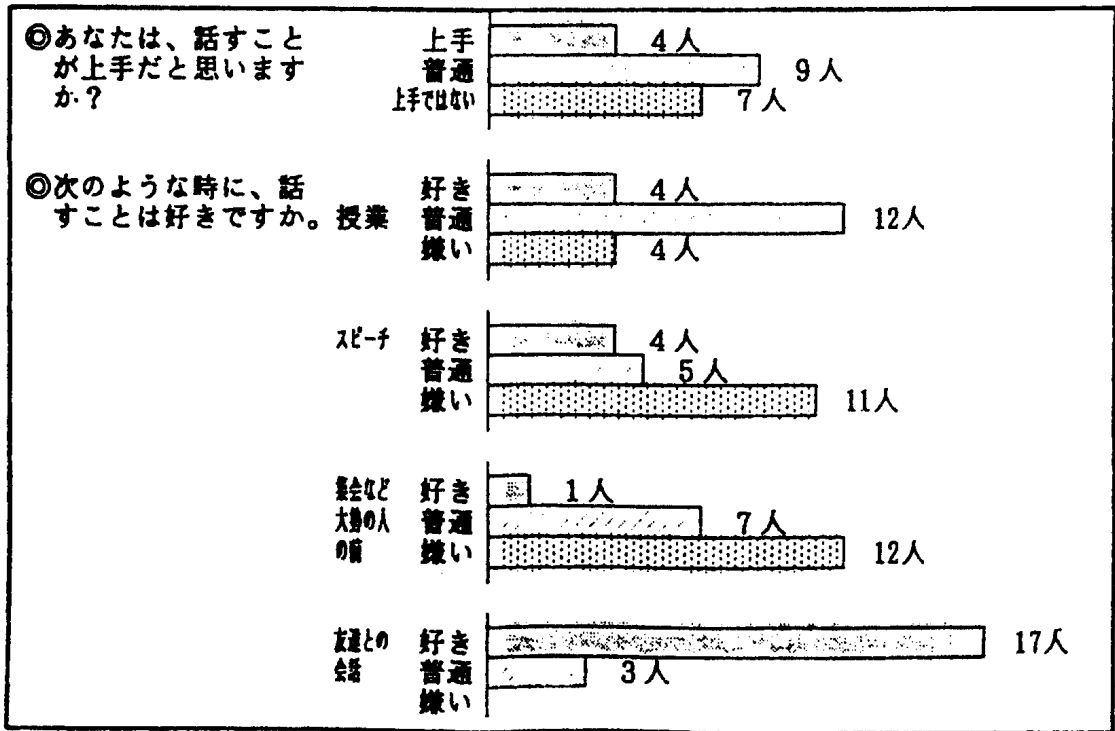
また、取り組み以前に話すことに関するアンケートをとって見たところ、次ページ（資料1）のような結果になった。普通という答えが多いのは、話すことに対しての意識の低さの表われともいえるので、教師がこだわることによって子供の意識を高めていきたい。

〔願う子供の姿〕

豊かな表現で相手に伝わる話し方ができる子

- ・ 目的や意図に応じて適切に話すことができる子
- ・ 目的に応じて時間や話題の順序などを考え、計画的に話すこと

資料1・話すことに関するアンケート



ができる子

- ・語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心が持てる子
- ・今までに使わなかった言葉や言い回しを使って話そうとする子

2、研究仮説

・話す意欲を高め、話す技術を身につければ、豊かな表現で相手に伝わる話し方ができる子の育成を図ることができる。

3、研究内容

研究仮説を具現するために、A、Bの研究内容に分け取り組んだ。

A 話す技術の指導の工夫

- ①音声・言語に関わっての指導
- ②用語・語彙・構成に関わっての指導
- ③態度（表情・工夫）に関わっての指導

B 話す意欲を高める指導の工夫

- ①話す内容に関わっての指導
- ②評価に関わって

4、実践例

《スピーチの実践の中で》

A② 用語・語彙・構成に関わっての指導

目的や意図に応じて適切に話すことができるとは、何のために、何を、どのように話すかをはっきりさせてから、聞き手に分かるように、また、納得してもらえるように話す能力を育てていくことである。そこで、スピーチをするにあたっての最初の段階では、ノートに記述したことを読むことから始めた。次には自分の話す内容を簡単にまとめたスピーチカード(資料2)を使って試みた。

A③ 態度(表情・工夫)に関わっての指導

言葉を豊富に使ったり巧みな言い回しで話したりすれば良い話になるというわけではない。朴訥でも話し手の表情や動きで気持ちや伝わってくる話がある。つまり、話す技術の指導の中で、話す表情や動きなどの態度に対しても指導していく必要があるということである。

そこで、目や手の動き、表情についても指導内容として計画に位置づけたり、教室掲示で示し、子供達に教えていった。ぎこちない

スピーチカード① (井亦 聖)

サテカマの友達とバーベキューをした時のこと

女何のために

友達といると楽しいことを知ってもらいために

★どんなことを話すのか

① ユーチがよって、ボケたこと

② 子供だけで、食べたこと

③ 友達が川におちたこと

④

★分かりやすく伝えるための工夫

おもしろい所をおおげ々にいっ、よた様子を体で表す。

資料2・スピーチカード

ながらも、子供達は少しずつ体を使い話そうとした。

B① 話す内容に関わっての指導

話す内容を次の三つの形態に分けて、年間の計画をすすめている。

・感じたこと、感動したことの話：感動、物語型

・考えを表明した話：意見、主張型

・情報を伝え、報告する話：伝達、情報型

行事に関わるものなど、普段の生活に関係するテーマを設定することによって、内容が具体的に話しやすくなり、話す意欲を高めることができる。計画に位置付けた。

また、教師が決めたテーマだけでなく、話したいこと、聞きたいことという観点から子供達が考えたものもテーマにすることによって、意欲を高めようとした。(資料3)

B② 評価に関わって

話すことに限らず、自分自身の伸びを自分で確認できると、次への意欲が生まれると考えている。このスピーチの取り組みの中でも、話した後は友達と教師からの評価が得られるようにし、得た評価から良さを価値づけることで話すことに意欲を持って取り組みめるよう指導している。

3月	2月	1月	12月	11月	10月	8・9月	7月	6月	5月	4月	月		
表情をつけて話そう			手を使って話そう		物を使って話そう		速さを考えて話そう		声の大きさを考えて話そう		目標		
6年生を送る会	下級生に送る言葉	6年間を振り返って	ベストを尽くす3学期とは	自由テーマ	家族の自慢をしよう	委員会の活動計画	こんな音楽会にしたい	夏休みの思い出	*群読	本音で話そう先生のこと	心に残る修学旅行	どんな6年生になりたいか	テーマ
		○						○		○			感想・物語型
○	○		○				○					○	意見・主張型
					○	○							伝達・報告型

資料3・スピーチ年間計画

《單元・班を代表しての中で》

單元「班を代表して」では、単に自分の意見や考えを相手に伝えるためだけでなく、委員会や縦割り班の人たちの意見や考えをまとめて話す学習を行った。代表として話す場合の必要な配慮としては、出された意見や考えを漏れなく、正しく、分かりやすく伝えることであるので、その点は留意して指導を行った。(資料4)

A② 用語・語彙・構成に関わっての指導

本單元の中では、委員会や縦割り班の中から意見を考えをただ羅列するのではなく、同じような意見をまとめるなど、要領の良い話し方が必要である。そのことを理解させた上で、具体的に、どのような言葉を発表の中で使ったら良いのかといったことも児童に考えさせた。また、教師も教科書の本文の言葉などを例にあげて、発表に使えそうな言葉を例示した。

B① 話す内容に関わっての指導

必ずしも話したいことが話せるからといって意欲が持てるというものでもない。話すことに必要感や義務感を与えることによって意欲が高まることもあると考えられる。したがって、教科書では、狂

資料4・單元「班を代表して」学習指導計画

	本時の目標	学 習 活 動	主 な 評 価 の 観 点
第一時	<ul style="list-style-type: none"> 委員会や縦割り班の活動で取材する内容を定めることができる。 	<ol style="list-style-type: none"> ①代表して発表するとき、気をつけなければならないことを話し合う。 ②活動報告会の概要を知り、委員会や縦割り班での活動の中で発表内容を考える。 ③発表内容を受けて、自分が取材してくることを決める。 	<ul style="list-style-type: none"> 代表して発表するときの留意点を考えることができたか。 発表に意欲を持ち、発表内容を考えることができたか。
第二時	<ul style="list-style-type: none"> 委員会や縦割り班の活動で取材してきたことをメモにまとめ、発表の練習をすることができる。 	<ol style="list-style-type: none"> ①取材してきたことをもとに、発表するためのメモをつくる。 ②メモを使って、めいめいに発表の練習をする。 ③グループの中でお互いの発表を聞き合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分なりに考えたメモをつくることができたか。 学級の友達に伝えようという意識を持ち発表の練習をすることができたか。
第三時	<ul style="list-style-type: none"> メモをもとに取材してきたことを友達に伝える発表をする。 	<ol style="list-style-type: none"> ①取材内容を発表する。 ②友達の発表を聞き、評価カードに記入する。 ③発表を聞き、友達の話し方の良い点を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 取材内容を伝えようという意欲を持って発表することができたか。 発表を聞き、友達の話し方の良さを見つけることができたか。

言「附子」のおもしろかったことをまとめて発表するという形で扱っているが、委員会や縦割り班の意見をまとめて発表するという指導計画をたて実践した。

縦割り班のリーダーとして動いているという実態に関わったこと取材し、発表する場を設けることによって、意欲を高めて話すことができたと考えている。

5、成果と課題

○学級の中に「話す場」を設定したことによって、話すことの難しさを実感しながらも、意欲的に話そうとする姿が見られるようになった。

○スピーチによって、話す目的や伝えたいことを意識して話したり、内容を伝えるための話し方の工夫したりする姿が見られるようになった。

●指導の中心が話し方や言葉の言い回しになっていた面があり、気持ちをこめた話ができるようにしていかなければならないと考えている。

●集会など多くの人の前で緊張したり、聞き手の反応によって話が脱線したりするなど、聞き手の指導もしていかなければならないと考えている。

実践記録を読んで

高橋 弘

この記録は、永井伸幸さんが、岐阜県郡上郡牛道小学校での実践をまとめ、平成八年十一月、岐阜県小学校国語研究大会の表現部会において提案発表したものである。永井さんは、平成二年三月本学教育学部国語科卒業、昨年四月からは同郡白鳥中学校勤務となり、現在に至っている。

小学校国語科の指導に関して、永井さんが、自分の担任する子どもたちの実態の中から「音言語」の問題を取り出してきたことは、これからの国語科教育の在り方を考えていく上で、まことに時宜を得たものであるとの思いが強い。その幾つかを述べてみたい。

(一) 音声言語による的確な表現力、理解力の育成は、国語科指導の重要な内容であること。

まず、永井さんが「テーマ設定の理由」の項で述べた子どもと教師の実情に注目したい。ここでは、子どもについて、毎日の生活の中で、話すことは多いが、その活動は無意識のうちになされており、また一人一人の表現力を考えると、不十分な子どもがいるという指摘がある。

小学校に入学してくるほとんどの子どもは、話す・聞く生活に関してある程度は対応できる力を持っている。教師の話すことは子どもに一応通ずる、子どもの話すことは一応教師に分かる、子どもどうしの話も一応通じ合う、そのことが、特に「国語」の授業における話す・聞くことの指導を、教師がゆるがせにする不幸な結果を生み出していると言っても過言ではない。

多くの子どもが、文字や文が書けない、教科書の文がしっかりと読めないという実態がはっきりしているから、教師はそれを打開しようと、国語の授業では「読み・書き」に力を入れる。教師が意識すれば、子どももそれを意識し、関心を持つようになる。話す・聞く活動のように「一応、なんとか」できれば、それは次第に教師の意識からはずれていく。それは、教師の意図的・計画的な指導からはずれていくことでもある。永井さん

が、「話すことがあまりにも無意識になされ……自分の話言葉に関心を持っている子は殆どいない」という実態が生ずるのも、当然の成り行きである。

我が国の国語教育は、明治以来伝統的に、文字の読み書き中心の読解・作文（綴り方）指導に力が注がれ、聞く話す力の育成については、学校の、国語の時間での、意図的・計画的な指導というよりも、生活全般、環境の中で自然に習得されていくことに依存してきた嫌いがあったのではないだろうか。

自分の思い・考え・事実認識等を、相手に分かり易く的確に表現する力を子どもたちに付けていくのは国語指導の中核であり、相手が表現してくるのが文字言語によるものであれ音声言語によるものであれ、一方がより重要、ということはないはずである。どちらも同じように教師が意識し、意図的・計画的に国語の時間に指導していかねばならないものである。

同様に、相手の思い・考え・事実認識等を的確に理解する力を子どもたちに付けていくのも、国語指導の中核であり、相手が表現してきたのが音声言語によるものであれ、文字言語によるものであれ、どちらか一方がより重要というものではない。どちらも教師が意識し、学校の、国語の時間に、意図的・計画的に指導していかねばならないものである。

これまでの国語の時間に、おろそかにされがちであった音声言語による的確な表現、確実な理解の力を子どもたちに付ける指導のために、永井さんのように、まず幾つもの教材の開発を試み、教師も子どもも話す、聞く力の育成について意識し、意欲を持って計画的な学習に取り組むようにしていくことが望まれる。

(二) 音声言語による的確な表現力、理解力の育成を、子どもたちに「自ら学び、自ら考える態度と力を育成すること」とのかかわりで捉え、そのために、「国語」の授業における「ひとり勉強」の交流の場を十二分に活用充実させること。

前項で触れた、音声言語の教材を開発し、永井さんの言うように、聞く話す指導の場をより多くしていくことが大切なことはもちろんであるが、より考えてみたいのは、子どもたちに「自ら学び、自ら考える態度と力」を育成することとかかわらせて、教材や作品の読み取り、感想の交流が行われる学習の場において、子どもたちが的確に話し、聞くことの指導を、一層意図的に行うようにすることである。

例えば、自分の読み取りを交流する場合、子どもが、「自分が読み取ったことをぜひ皆に聞いてもらいたい、そしてそれについての皆の意見、感想をぜひ聞かせてほしい、それによって

自分ももっと勉強したい」と考えれば、「どのように話したら、皆には分かってもらえるか」と、内容、話し方について考ええ、聞き手の反応を確かめながら話すであろう。

聞き手の子どもたちも、「○○さんはどういうことを話すのだろう。参考になることだったら、ぜひ自分の中へ取り込みたい」という思いで聞けば、子どもたちの方から、「もう少し大きな声で話して」「ゆっくり話して」「〳〵のところをもう少し詳しく話して」とお願いが出たり、「わたしの気付かなかったことを教えてもらえたよ」「よく分かる話し方をしてくれてありがとう」などのお礼も出たりするであろう。

交流学习の場は、「自ら学ぶ」子どもの育成と結びつけることによって、話す聞く力を子どもたちに付けるためのこの上ない場になるのではないだろうか。

(三) 的確な表現力、理解力の育成のために、一人一人の子どもにその「うでまえ」を確実に付けてやること。

永井さんは、「研究の仮説」「研究内容」のところで、話す技術を、指導の大切な柱と捉えている。これまでの国語教育では、内容に重きを置いて技能を軽視しがちであったが、子どもたちに「力」を付けていく上で、技能は欠かすことのできないものである。日本には、『うで』がある「『確かな』うでまえ」と

というような、信頼感のこめられたことばがある。音声言語にかかわる指導においても、その内容指導も大切であるが、その内容を、聞き手に的確に分かってもらうための「話し方のでまえ」をどの子も身に付ける指導、相手の話を確実に理解するための「聞き方のでまえ」を、どの子にもきちんと付けていく指導がどうしても必要になってくる。

永井さんの実践記録は、これからの国語科指導の方向を展望する上で、示唆の多いものである。永井さんの今後の一層のご精進を期待するとともに、在学する会員の皆さんが先輩の学校現場での活躍に倣って、国語科教育についての一層の研鑽を積まれることを祈念したい。